

こんにちは、国語科の松崎です。今回は古文の問題です。大阪大学(文学部)、平成十一年の問題です。

次は『とばずがたり』の一節です。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

尾張の国、熱田の社に参りぬ。御垣を拝むより、故大納言の^①知る国にて、この社は我が祈りのためとて、八月の御祭りには、かならず神馬をたてまつる使ひを立てられしに、最後の病ひの折、神馬を参らせられしに、生絹の衣をひとつ添へて参らせしに、萱津の宿^{しじゅく}といふ所にて、にはかにこの馬死にけり。驚きて、在庁^{ざいじやう}が中より馬は尋ねて、参らせたりけると聞きしも、^②神は受けぬ祈りなりけりとおぼえしことまで、数々思ひ出でられて、あはれさも悲しさもやる方なき心地して、この御社に今宵はどどまりぬ。

都を出でしことは、如月の二十日余りなりしかども、さすが慣らはぬ道なれば、心はすすめど、^③はかも行かで、弥生の初めになりぬ。夕月夜はなやかにさし出でて、都の空もひとつながめに思ひ出でられて、今さらなる御面影もたち添ふ心地するに、御垣の内の桜は、今日盛りと見せ顔なるも、^④たがため匂ふ^{いづゑ}なるらむとおぼえて、

(a) 春の色もやよひの空に鳴海潟^{なるみがた}いまいくほどか花も杉村

社の前なる杉の木に、札にて打たせはべりき。思ふ心ありしかば、これに七日籠りて、またたち出ではべりしかば、鳴海の潮干潟をはるばる行きつつぞ、社をかへり見れば、霞の間よりほの見えたる朱^{あけ}の玉垣神さびて、昔を思ふ涙は忍びがたくて、

(b) 神はなほあはれをかけよ御注連縄ひき違へたる憂き身なりとも

注 热田の社——热田神宮。現在の、名古屋市热田区。

故大納言——作者二条の父雅忠。

萱津の宿——東海道の宿駅。現在の、愛知県海部郡甚目寺町。

在序——在序の官人。国府において実務をおこなう役人。

神は受けぬ祈り——恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな(『伊勢物語』)

強者の戦略

問一 傍線部①の「知る国」とはどういう意味か、解釈しなさい。

問二 傍線部②の「神は受けぬ祈り」とはどういうことか、説明しなさい。

問三 傍線部③の「はかも行かで」の意味を書きなさい。

問四 傍線部④の「たがため匂ふ」を解釈しなさい。

問五 和歌(a)に用いられた掛詞を指摘し、具体的に説明しなさい。

問六 和歌(b)をわかりやすく現代語に訳しなさい。